

## 「個人分析」と女性

茨城大学 東 敏 雄

### 1. 視点

- ① 村落研究において分析の対象とならなかったということでは女性に限らず男性も同じ。つまり個人分析は学問分野では認知されていなかった。これに対し村落研究における「個人分析」の市民権を確立するというなかで女性を考えるという思考回路も必要ではないか。従来の研究と対立するものとしてではなく。
- ② 経済学・経済史にあっても、社会構成体を軸とする分析は階級・階層が分析レベルの出発点であり、終着点。農村では地主、富農、中農、貧農、（大農、中農、小農、過小農）等々。この場合、歴史的な個性を持つ農民個人は研究対象にならない。
- ③ たとえば分析が地主と小作農民というレベルに至っても、小作農民は零細貧農等の階級・階層としての性格規定にとどまり、歴史的特性を持った農民個人の顔がは現れることは少ない。農民の意識と行動は経済的規定を基本とする階級・階層視点から「帰納的」に導かれる。男女の区分は現れない。
- ④ 社会学の家と家連合が類型的に研究・分析にあっても、同族的結合の基礎にある家と家族関係の分析からいわゆる「家族主義」が解明されても、家族中の個人の分析は、家族間の、たとえば親子、夫婦、長男・次三男等、抽象的な人間関係による一律的な規定に埋もれ、時代的個性を備えた個人は浮上しない。

### 2. 試論

女性が村落研究の中で研究対象として定着していなかったことは事実、が、その前に男性も含めて「歴史性を持った個人」が研究対象とされていなかったということも認識しておく必要あり。この個人分析のなかの重要な項目として女性を置いてみては。このような視点も必要かもしれない。問題はここから女性につないでゆく回路。

① 農家は経営体としての側面を持ちそこに経営主体・経営者が存在する②。彼（彼女という場合は少ない）の、経営者農民としての意識と行動の分析。つまり個人分析の領域に入って行く。個人分析は農民的経営に歴史的性格を与えることができるかどうかという視点を介し体系的な学問分析になる。おそらくこれだけでもひとつの飛躍であろう。

② 農家が経営体としての性格を前面に出すこと自体がひとつの歴史的所産であり、研究事項である。これについては暉峻氏のC部分の意識化、V意識の確立、等先行研究がある。これは農民の経営者意識、労働者意識につながるわけだが、これが個人分析に接続してゆくという状況ではなかった。しかしいずれにしても農民が経営者としての意識を持つに至ること自体がひとつの研究課題であることには違いない。

③ この場合、経営者農民の多くは農家の主<sup>ぬし</sup>であり、あるいは後継者であり、総じて男性。分析は当然この経営者としての男性の歴史性を持った意識と行動、それをもたらした社会的諸関係に進む。ここにおいて「労働と意識の実態を踏まえ」た議論は必然となるはず。彼との関連における女性の歴史的な特徴と資質、役割。彼の歴史的限界も。

④ この視点での女性の個人史利用の可能性は。本格的には「聞きがたり」が可能な時代、たとえば農地改革以降・現代になるのでは。